

「神とその恵みの言葉とに委ねます」

高校野球の試合中、ある選手がミスをした時、解説者の元監督は「今のはせめて体で止めてほしかったですね」と。それを聞いて「ミスをした選手にまた鞭打つような言葉を」と思いました。でも、次の瞬間、「あ、これはベンチにいる監督が言いたくても言えないことを代弁したのではないか」と思い直しました。監督は作戦を立てることはできても自分で全て解決することはできません。全ては選手たちが動いて初めて結果が出ます。だから、彼らを萎縮させないように「上手くいったら君たちの練習の成果だ。失敗したら監督の責任だ」と送り出すのです。精神的な負担の大きさを思わされます。

「私があなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り込むようなものである」(マタイによる福音書 10:16)と言われた時、イエスはどのような心境だったのでしょうか。弟子たちが送り出される「この世」は狼に溢れていることをイエスは知っておられます。それでも「神が全ての者を愛し、救われる」という大切なメッセージを伝えてほしいと願われて、イエスは弟子たちを安心して送り出されました。

なぜなら、神が弟子たち一人ひとりを愛しておられることをイエスは知っておられたからです。何があっても神が一人ひとりを守られることを知っておられたからです。だから、「あなたがたは蛇のように賢く、鳩のように無垢でありなさい」(マタイによる福音書 10:16)と、「神の思いに素直に聞いて、神と共に歩みなさい」と教えられたのです。

パウロはエフェソを後にして、エルサレムへと向かうことになりました。パウロもまた、「私が去った後、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、私には分かっています」(使徒言行録 20:29)と、この世が狼に溢れていることを知っています。そればかりか、「あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます」(使徒言行録 20:30)と、結束が固いはずの弟子たちの群れの中から脱落する者が現れるばかりでなく、獅子身中の虫が現れることを予見しています。

神の言葉を直接聞いていたイエスとは異なり、パウロは神と直接交流することができるわけではありません。もちろん、パウロも神を信頼しています。それでも、不安がなかったかと言えば嘘になるでしょう。「私が三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして」(使徒言行録 20:31)ほしいと願うのは、少しでも不安を取り除いてほしいという願いの表れです。高校野球の監督が選手たちに「これまでの練習を思い出せ！」と発破をかけるのに似ているかもしれません。

その上で、「そして今、あなたがたを神とその恵みの言葉とに委ねます」(使徒言行録 20:32)と、一人ひとりのことを神に託すのです。神の言葉こそが一人ひとりを造り上げ、立ち上がらせるのだとパウロは知っています。それは、パウロ自身がそのように造り上げられ、いかなる困難にも立ち向かう力を与えられ続けてきたからです。「私が、『もう主を思い起こさない／その名によって語らない』と思っても／主の言葉は私の心の中／骨の中に閉じ込められて／燃える火のようになります」(エレミヤ書 20:9)と預言者エレミヤが語ったように、神の言葉が植え付けられた心はいついかなる時でも燃え上がり、神の言葉を伝える者へと作り変えられていくのです。

私たちが生きる今、この世界もまた狼に溢れています。神の言葉を伝えたいと願っても聞く耳を持たない者が多くいます。それでも神は私たち一人ひとりに神の言葉を託されているのです。

パウロの「あなたがたを神とその恵みの言葉とに委ねます」(使徒言行録 20:32)との言葉は、私たち一人ひとりのための言葉でもあります。ならば私たちもパウロのように、エレミヤのように、また詩編の詩人のように「神よ、私の心は確かです。／私の心は確かです。／私は歌い、ほめたえよう」(詩編 57:8)と、神の思いに答えて神の言葉を伝える一人となろうではありませんか。狼の中に送り込まれた羊として、精一杯神を賛美し続けるのです。

